

# 九 ツ 塚

## 緊急発掘調査報告書

1987

新潟県小須戸町教育委員会

## 序

九ツ塚の緊急発掘調査は、小須戸町の道路改良工事にともない九ツ塚遺跡の一部が土砂崩れすることもある土取事業の対象となった。さらに事業の計画工程に照らしできるだけ早期に発掘調査を実施するよう要請され、これに対応して町教育委員会では、新潟県教育庁文化行政課の指導を得て発掘調査を行なうことになった。

埋蔵遺跡の発掘調査は初めての経験でありましたが、幸い当町の新潟県文化財保護指導員でもありました木村宗文先生の助言をいただき笹神村の川上貞雄先生（日本考古学協会会員）を中心に作業を進めることになりました。

発掘には、地元の矢代田地区老人クラブの人達の協力を得て進められ、10月末の雨の日にテントを張っての作業もありました。直接発掘の指導に当たられた川上先生をはじめ、協力をいただいた諸先生方には忙しいなかをさいての参加となり、ここにその調査報告書がまとまり発刊の運びとなりました。

発掘が終わり、いよいよ道路工事が進められ、昔の面影がすっかり失われて行くのを見ると寂しさもありました。調査のすべてをここに報告書としてまとめ後世に伝えるものであります。調査計画から現地指導、報告書作制に至る一連の業務に直接、指導助言をいただいた川上先生並びに諸先生方の御苦勞に対し、改めて感謝の意を表するとともに、新潟県教育委員会の御指導をはじめ、地域および調査にご協力いただきました皆さんにも改めてお礼を申し上げます。

昭和 62 年 3 月

小須戸町教育委員会教育長 丸 山 敬 雄

## 例 言

1. 本書は、新潟県中蒲原郡小須戸町大字矢代田字三沢原に所在する縄文遺跡「三沢原遺跡」の確認調査と、同遺跡内にある「九ツ塚、第1号塚」の発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、町道改良工事とそれに伴う土取事業等で破壊が予想されることになった遺跡の事前調査であり、小須戸町教育委員会が実施した緊急調査である。
3. 調査は昭和61年10月10日の確認調査と、10月下旬における測量調査及び発掘調査、12月下旬の整理作業を以って終了した。
4. 出土品は遺物台帳と共に小須戸町教育委員会が保管する。
5. 本書における第1回小須戸町遺跡分布図は昭和60年度における新潟県教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査を基にして作成した。  
第2図遺跡周辺と調査位置図は小須戸町役場が作成せる実測図を基に加筆して作成した。
6. 本書の執筆はI-1を青木達男、その他は川上が分担した。
7. 発掘調査関係者は次の通りである。

調査主体者 丸山 敬雄（小須戸町教育委員会教育長）

調査担当者 川上 貞雄（日本考古学協会々員）

調査員 木村 宗文（元新潟県文化財保護指導員）

杉本 恵子（CAE会員）

佐藤 友子（ ” ）

作業員 小林 博二 丸山末一郎

轡田 治作 穴沢長太郎

田沢 弘 高山三太郎

阿部重三郎 轡田四郎吉

調査協力 保科 裕治 田沢 稔英

新潟県教育庁文化行政課、加茂市教育委員会、星田建設KK

事務局 佐藤 清 青木 達男（専従） 森田久美子

# 目 次

## I 序 章

1. 調査に至る経緯……………2
2. 九ツ塚の立地と周辺の歴史的環境……………3
3. 三沢原遺跡の確認調査……………5
4. 九ツ塚の確認と発掘調査の経過……………7

## II 遺 構

1. 塚の形態と土層……………8
2. 下層遺構……………9

## III 遺 物

## IV 小 結

1. 2号塚、3号塚の形態……………15
2. おわりに……………16

- 図 版 ……………19

## 挿 図 目 次

1. 小須戸町遺跡分布図……………4
2. 遺跡周辺と調査位置図……………6
3. 1号塚平断面図……………8
4. 1号塚土層図……………9
5. 1号塚下層の竪穴式  
建物遺構……………10
6. 1号塚出土、土器(土師器)……………11
7. 1号塚出土、土器(須恵器)  
鉦鼓<sup>1/2</sup>……………12
8. 2号塚平断面図……………14
9. 3号塚平断面図……………15

## 表 目 次

1. 小須戸町遺跡一覧……………5
2. 錢貨年代表……………13

# I 序 章

## 1. 調査に至る経緯

南北に延びる新津丘陵の西麓に連なる集落と、その西方に蛇行する信濃川の自然堤防に営まれた街々からなる小須戸町は、豊かな緑に恵まれた大地である。この丘陵に沿って走る日本国有鉄道信越本線の矢代田駅こそ一昔前まで小須戸町の表玄関であったし、近代文明の受入れ口でもあった。またこの矢代田街より峠を越せば、中世以来の金津保や菅名庄（五泉市、村松町）の故地へと通ずる古代からの交通の要所とされていた。

さらにこの地域は、町内における遺跡の豊庫ともいわれ、過去の遺跡詳細分布調査結果では、三沢原、三沢原B、円塚、九ツ塚、三沢の遺跡が集中し、縄文土器や石器を始めとし、須恵器、鉾滓等の遺物がしばしば検出され、昔からこの地域の人たちにとって原始古代へのロマンが漂っている場所でもあった。

いま丘陵西麓に延びた舌状の台地が、その先端を鉄道によって削平され、背後も新国道403号線によって切り取られ、小さな独立台地を呈する地に断崖によって通行不能な旧道が残った。台地上に残った土地の利用低下、崖下住民の不便さ等から、この旧道の再利用を計るため、道路工事に伴う台地の削平工事が行なわれることとなった。しかるに、この削平予定地内に、周知の遺跡である九ツ塚の一つ（九ツ塚、第1号）が所在すること、町内遺跡番号1に当る三沢原遺跡が「信越線工事で全壊」とされながらも、その地番がこの予定地内に残存すること、さらに遺跡には登録されていないが、墓塔や供養塔等が建立されていることなどから、これらの調査を前提とする確認調査を行なうべく、関係各庁、課と討議の結果、急拠工事を延期し、とにかく発掘調査を急ぐことになった。時はすでに秋も深まった10月のことであった。

小須戸町にとって、発掘調査は初めての事業であり、当事業の勃発以来1ケ年余にわたって新潟県教育庁文化行政課から細部にわたって種々のご指導を載いて来た。また、幸いにも当町在住の木村宗文氏（前新潟県文化財保護指導員）のご指導ご援助を載けたことは言うまでもない。これらの結果、三沢原遺跡（縄文遺跡）はすでに湮滅、九ツ塚の存在も遺跡台帳上から不確定とのことで、当工事に立合う程度の考えもあったが、一応縄文遺跡の確認調査を要することとなった。

調査に当っては川上貞雄氏（日本考古学協会々員）に依頼することとなり、10月10日の祭日をこれに当て調査を決行した。この結果は次項に記述する通りであるが、当確認調査における現地周辺踏査の結果、九ツ塚の1号、2号、3号塚の残存が確認され、この内1号塚が、当工事の範囲内に所在することが明らかとなり、改めて九ツ塚1号の本調査を行うこととし、調査員の日程により、10月下旬の悪天候のもとでこれを行なうこととなった。さらに同2号、3号塚の測量調査も合せて行なうことが出来たが、調査員にとっても、町当局にとってもあまりにも突然のことであり思うにまかせられなかった。

この一連の調査における経費は小須戸町の単費である。

## 2. 遺跡の立地と周辺の歴史的環境

小須戸町はその周辺を新津市、五泉市、白根市及び田上町に接する小都市である。そこは面積わずか 17.21 ㎏、人口 10,345 (61年 7月推計) に過ぎないが、越後平野のほぼ中央にあり、花と緑をキャッチフレーズにした豊かな田園都市である。広大な越後平野の東限をなす新津丘陵の一画、菩提寺山(248.4)の西麓の丘陵地帯に並ぶ集落と、西方に流れる信濃川右岸の自然堤防上の集落と、その中間における肥沃な水田地帯とから成る大地である。越後平野に出た大河は東側の丘陵と平行に北上し、ここ小須戸町大字水田周辺で最も丘陵に接近し、その流れを西向に変えながら日本海へ向う。

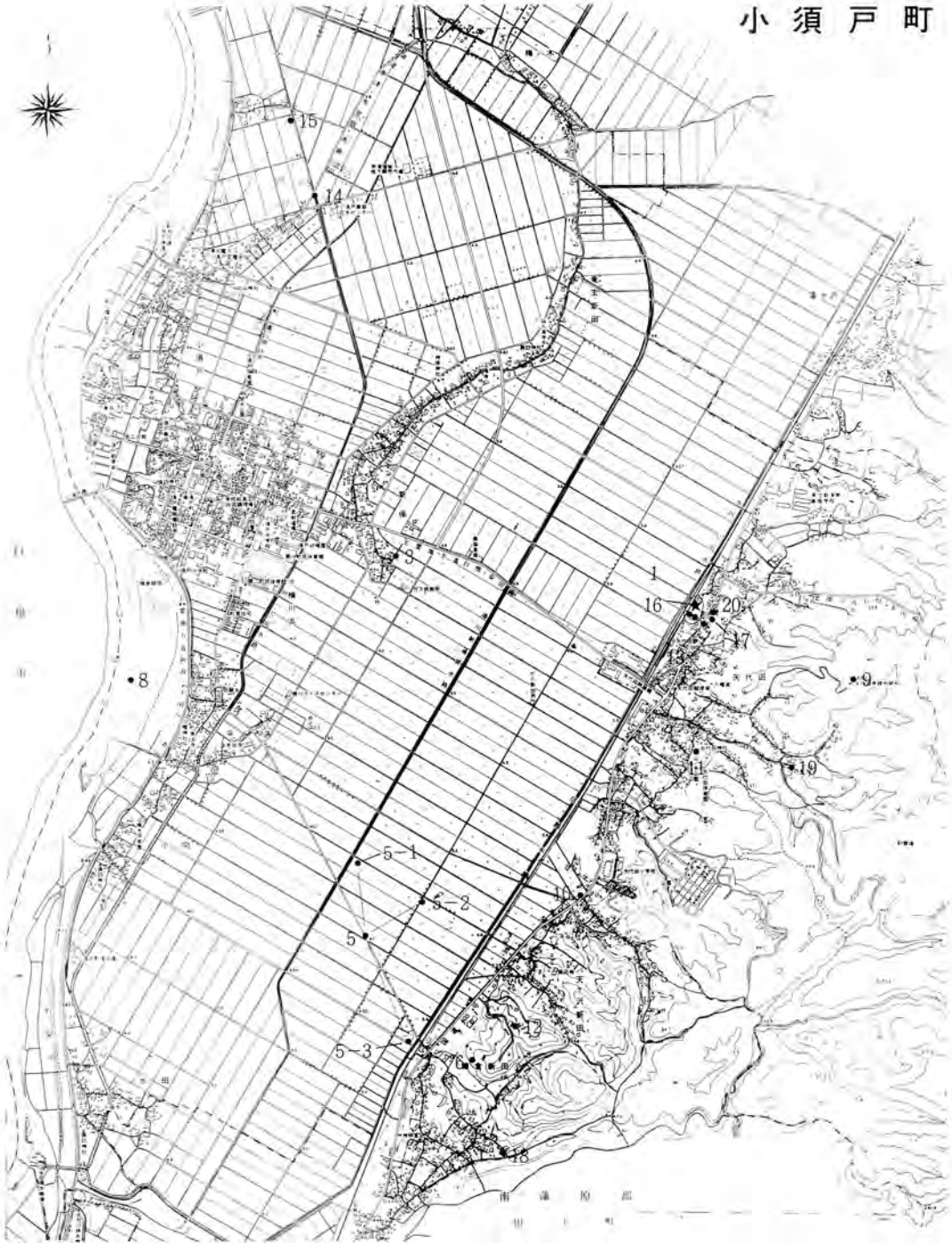
丘陵地帯には多くの遺跡が知られ、北側の新津市程島の原遺跡を始め、田上町の古屋敷遺跡、川船河遺跡、加茂市の市役所遺跡、遊覧場遺跡等の縄文時代の遺跡や、同じく諏訪神社前遺跡、千苜遺跡、石川遺跡等の古墳時代の遺跡が点在し、低湿地帯や信濃川の自然堤防上にはどちらかと云えば、奈良・平安時代と考えられる遺跡があり、新津市の川根遺跡、古津舟戸遺跡を始め、田上町の長沢遺跡、二段あげ遺跡等々が知られている。中世の遺跡や近世の塚遺構等もこれらの各地域に点在し、また近年脚光をあびている三条市保内の三王山古墳群もこの丘陵であり、さらに加茂市福島古墳群、田上町アリ塚古墳の発見等も耳新しいものである。

小須戸町における遺跡の分布も同様であり丘陵端、低湿地帯、河川の自然堤防上に位置する。これらは第1図に示した通りの20遺跡があり原始時代1、古代8、中世2、中世城館址3、寺院址、生産址2、塚6基、石仏1、中世2がある。(以上の遺跡数は時代的に重複するものもある)この記録は小須戸町における遺跡台帳によるものであり、これは又、新潟県遺跡台帳と同様である。いま、遺跡No.5が4ヶ所に分割されてはいるが同一遺跡と見られている様であるが、300m～500mと距離を置くことや、記録された遺物にも変化があることから、初期の如くやはり一考を要するところであろう。いま遺跡の特色としては、古代と推定されるもの、時代的には不明瞭だが塚遺構を残す遺跡が多い。さらに中世館址が一線上に等間隔に所在することなどが上げられよう。

三沢原遺跡や九ツ塚の幾つかが所在するのは、新津丘陵の西麓である。当丘陵の主峯の一つである菩提寺山の北西に延びる尾根の末端に位置する台地上にある。この台地は周辺で最も北西に張り出したもので、現在その先端部を国有鉄道によって裁ち切られており、背後は国道403号による切通しとなりあたかも独立台地の様相を呈している。この台地上に三沢原遺跡(縄文遺跡)の一部が残存している可能性があること、また九ツ塚の内の三基が認められ、さらに近世石塔・石仏等が並んでいる。国道を隔てた東方の台地上には、同じく九ツ塚の一つと云われている田塚(三沢塚)、三沢製鉄遺跡、三沢B遺跡がある。これらの遺跡を有する台地は、いわゆる山麓の街並との比高差8.2m、西側の水田面とは9mの比高があり、標高16.10m前後である。

この正式な地籍は小須戸町大字矢代田字三沢原1990番地を中心に1983番地から2001番地の空地、畑、山林である。調査の主対象となった九ツ塚一号は1990番に所在し、2号、3号塚は1983番地に所在する。

小須戸町



第1図 小須戸町遺跡分布図

第1表

No.	遺跡名	種別	所在地	遺物遺構
1	三沢原	遺物包含地	大字矢代田字三沢原1988	縄文土器、石器
3	東腰付	"	" 新保字東腰付82・142	須恵器
5	大沢谷内	"	" 天ヶ沢新田字丸山922 大沢谷内729	土師器、須恵器
5 <sup>1</sup>	丑ヶ島	"	" 横川浜丑ヶ島	須恵器
5 <sup>2</sup>	丸山	"	" 天ヶ沢新田字丸山904	"
5 <sup>3</sup>	三軒屋敷	"	" 鎌倉新田字下谷内69、70 73、35-2	中世陶器
6	六兵衛沢窯跡	窯跡	" 天ヶ沢新田字六兵衛沢	須恵器
8	横川浜堤外地	遺物包含地	" 横川浜	土師器、須恵器、 陶磁器、他
9	了専寺跡	寺院跡	" 矢代田字元寺4089、4095	
10	五本田館	館	" 矢代田字五本田6	磁器
11	矢代田館	"	" 矢代田字十二屋敷	
12	西紙屋山館	"	" 天ヶ沢新田字西紙屋山	
13	三沢	製鉄跡	" 矢代田字三沢3812~3814	鉾滓
14	杉行塚	塚	" 小須戸字杉行塚2384-1	方形土壇(方10m)
15	榎行塚	"	" 小須戸字榎行塚1123	方形土壇(方7m)
16	九ツ塚	塚群	" 矢代田字三沢原1990他	須恵器
17	円塚	塚	" 矢代田字三沢3812	直径20m
18	居村	遺物包含地	" 鎌倉新田字居村357甲356の1	土師器
19	西善寺石仏	石仏	" 矢代田字腰間入4,385	石仏
20	三沢原B	遺物包含地	" 矢代田字三沢3,770、3,810	須恵器

第2図の西側に当る位置がそれであり、1T~4Tを記入した土地は畑地、1号は九ツ塚1号である。北東の5Tは湯殿山碑、6Tは近世石造物が並ぶ。これらの範囲が開発の範疇に当るが、4Tの南側は住宅が建ち、その南側の竹林内に九ツ塚の2号塚、3号塚が所在する。なお、1T~4Tは次項の三沢原遺跡の確認調査溝である。

### 3. 三沢原遺跡の確認調査

三沢原遺跡は、小須戸町史や小須戸町風土記にも記された町遺跡番号1番に記載されている縄文時代の遺跡である。昭和48年度における新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードに依れば、当開発地域内の台地上であり、その地籍は小字三沢原1988番地、地目山林とあり、さらに台地の先端部は信越線工事で消滅していると報告されている。同じく60年度における調査カードには遺跡の現状は畑、宅地に広がることが指摘されている。このことは前述した当台地上のほぼ全体をさすものと考えられ、当地における一連の工事に先立って遺跡の有無及び範囲の確認調査を行うこととなった。調査は10月10日の祭日が当てられ、前述の縄文遺跡と、北端にある近世石造物等をも対象とした。なお後述するが現在すべて消滅したと記録されている塚群を確認した。

イ) 三沢原縄文時代遺跡の確認調査、開発予定地内の畑地ですでに収穫を終えた部分に試掘溝を以って調査に替えた。この試掘溝は認意の地点に定められ、3Tは1×3m、その他は1.5×





第2図 遺跡周辺と調査位置図

4 mとし、4ヶ所を定めて調査した。その結果、地層は表土（耕作土）13~30cmと一定ではないが、下部に混土層を有して地山のローム層となり、遺跡を推測するいわゆる包含層等の検出は出来なかった。なお地山は平均して2.5度の西向き傾斜を呈していた。

ロ) 近世供養塔群について、台地北端に近世の石造物等が並ぶ。樹令200年程の老赤松の下に並ぶこれらの塔は、この地が何等かの霊地と感じずにはいられない。当開発によりこれらを移転すること、合せて下層部の確認を試みた。

湯殿山碑、明治17年建立、改めて図示しないが、第2図でも知られる如く土壇上に基台を有する石碑を建て、周囲に石柵を設けている。前面にはコンクリート製の階段数段を有し、前面部も広くコンクリートを敷きつめている。この奉納品と思われる手水鉢がある。石碑取除き後土壇を調査したところ、土壇は370×250cm、高さ65cmの方形で土は周辺部の地山のロームを盛り上げたもので内部的な構造施設は見られなかったが、寛永通宝二枚を検見した。明治17年建立の碑と寛永通宝との確たる関連は不明である。

湯殿山碑の北側には石仏、墓石、供養塔、石仏が並ぶ。第1の石仏は如意輪観音で、舟形後背に銘文を見るが判読不明である。墓石は一般に箱型石塔と呼ばれるものである。中央に戒名、左右に年号が記される。「空海雲院龍信士 嘉永五年二月□九日」。供養塔は頂部に相輪を有する笠塔婆形で、四面に文字を刻すが判読出来ず塔の目的を知ることが出来な

い。一応記録すれば、正面「不明」、右側面「□願天下泰平国上安□」左側面「不明、禪流敬白」裏面「宝曆十四甲申4月16日」。第2の石仏は地藏坐像である。これらの石造物は後世の寄せ集めと云われていたが一応下層部を調査した。第2図の6 Tがそれである。その結果、第2石仏の下部より60個の拳大の河原石を見たのみであった。以上の石造物は、当地地の南方の国道脇の2ヶ所に仮安置された。

#### 4) 九ツ塚群の確認と発掘調査の経過

当地地上における塚の存在は周辺の人々の知るところであった。昭和48年度における新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードを要約すれば、「明治26年頃までは9基の塚があったが矢代田駅設置で消滅し、三沢原に3基の小規模のものと三沢に一基が残る」とある。次いで60年8月における当地区の遺跡分布調査においてはこの三沢原地区の三基を見落とし、「現在はすべて消滅し、塚があったと思われる所に地藏尊等の石造物が安置されているが、塚は確認できない」と記録された。

私達はこれらの確認の結果、当地地上に3基の塚を見、1基は台地のはゞ中央部の三沢原1990番地に、他の2基は同1983番地に実在することを確認した。この内、前者は当開発地内に当ることから日を改めて発掘調査を行うこととした。なお発掘を予定した塚を1号塚、他の2基をそれぞれ2号塚、3号塚と呼ぶことにした。

1号塚は台地の畑地の中に位置し、西側背後は深い崖を呈す。この台地の西側はかつて人工の削平による崖であるが、自然の浸触によって徐々に狭まり現在では塚遺構の裾部をも失っている塚を含む周辺は篠竹に被われ、足を入れる間隙もなく、又この竹根のために旧状を保存して来たかにも思われる。当開発工事による破壊が決定され、地元関係者によって供養の儀が終了されている。

調査は10月23日及び25日の2日間における3基の測量調査と、同26日から30日までの4日間の発掘作業等を以って行った。調査は越後特有の初冬の悪天候と西風の下で行なわれることとなり、参加者に多大の難行を課せることになった。

調査の結果、1号塚は次項の報告の如く下部遺構を伴う塚であることが分った。また2号、3号塚共測量調査を執行することが出来、後述する形態を留めていることが記録された。

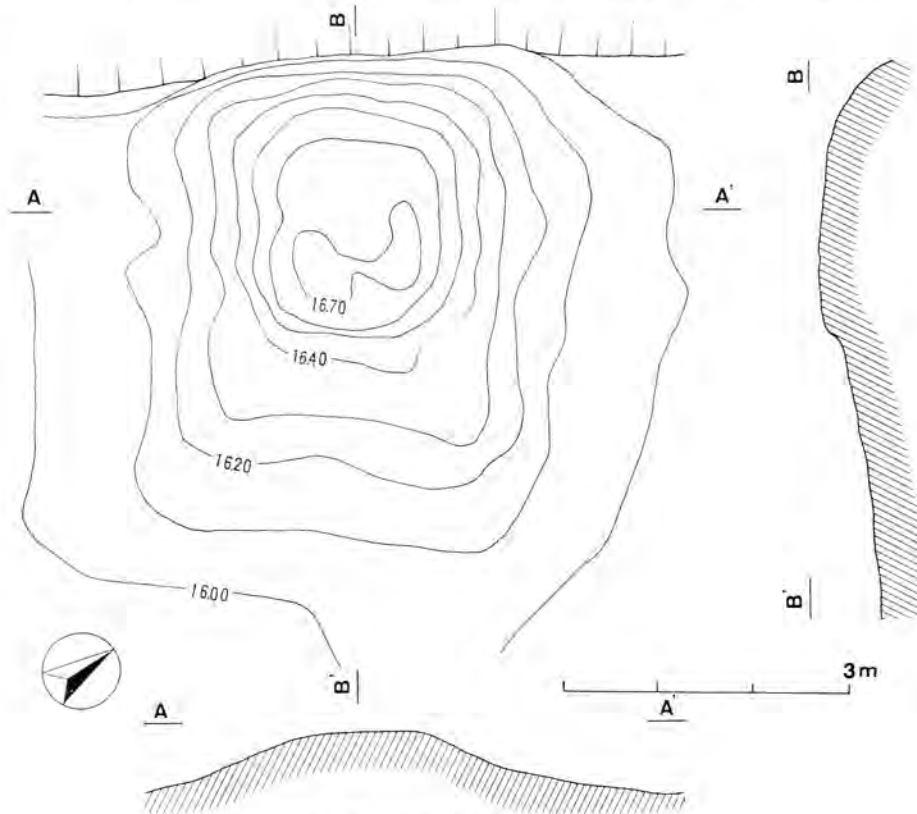
## II 遺 構

### 1. 塚の形態と土層

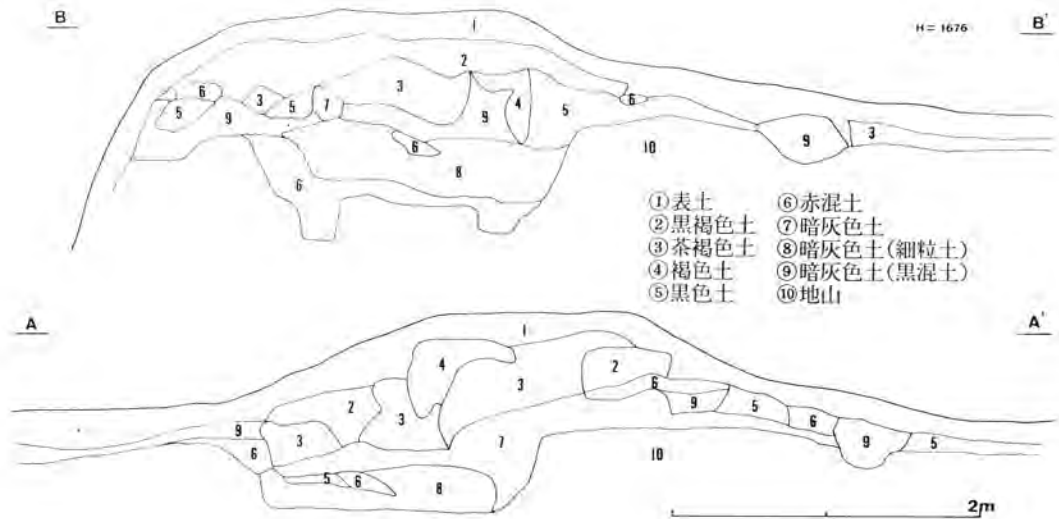
1号塚は繁茂する篠竹の薙払いの結果ほぼ旧状を保っている事が分った。第3図は10cm間隔で行った実測図である。塚の西側の裾部を欠失しているが、東西6m、南北6.8mの方形で高さは0.7mである。東側の中間にはやぶ崩れているがテラス状の張り出し部分が認められる。塚頂部はほぼ2m四方の方形で16.60mの等高線上に沿うものと見られ、前方部のテラスは凹形で頂部の一部を包むかの如くである。中心部分の奥行は16.20から16.40m線までの1.3m、両脇部分では1.8mを測り、幅はほぼ16.20mライン上の3.8mを測る。言うまでもないが頂部と前方部の比高は0.2~0.3mである。塚の裾部は周囲の畑地や藪原と水平となり表面上における周溝等の構造は認められない。

調査の都合上、塚の頂部のほぼ中央部分を中心に南北にA~A'ライン、これに直角に交わるB~B'ラインを設定したが、A~A'ライン(以下Aセクション或るいはBセクションと呼ぶ)はN34°Eの方位である。

発掘調査に当ってはこのA及びBセクションに依る土層及び断面的調査をすることとし、A~



第3図 1号塚平面断面図



第4図 1号塚土層図

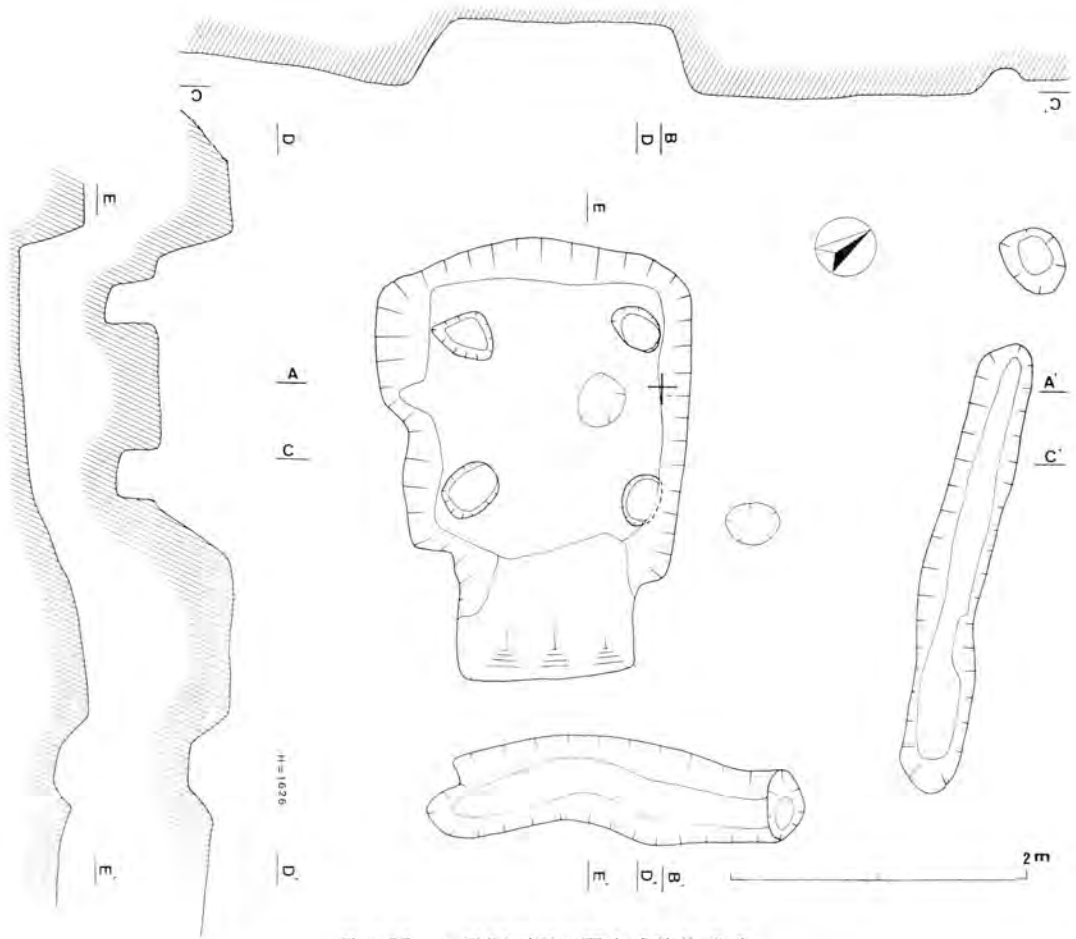
B区、A～B区、A'～B区、A'～B区と4分し、ベルトを残して進行した。これらの調査区を一応記載順に1区～4区とする。なお調査の進行は第1区～3区とは平行して行なったが、下層部における遺構が第1区、第2区に片寄ることが判明したことから第4区は最終段階での調査と相成った。

塚の盛土における土層は第4図に示したA、Bセクションの通りである。第1層の竹根の密集した表土とBセクション第2層の黒褐色土、及び下層遺構である竪穴内⑦⑧の暗灰色土がやゝ安定したものであるが、中間部におけるその他の土質は小ブロックを呈し、盛土構成の様相を語っている。

以上が地上部に見られる上部遺構である。

## 2. 下層遺構

この表題で記した下層遺構とは塚本来の内部施設（内部遺構）ではないが、塚に関連するものと考えられる下層部の遺構である（第5図、図版8、9）。当遺構は第5図に示した様に小形の方形竪穴式建物遺構である。位置的には塚の第1区、第2区にあり、第5図の平面図における竪穴の北壁に記した十字のポイントが塚頂部のA、Bセクションの交差位置に当る。竪穴遺構は床面で東西1.85m、南北1.60m、確認出来た上部の幅は同じく2.20m、2.15mを測る。竪穴の深度は同じく確認出来る地山の表面より0.5m、現地表よりは0.65m、塚の頂部よりは0.78mである。竪穴の四隅には直径30cm程の柱穴が残り、東方の壁面は25度を緩やかに斜状を呈し、出入口として開かれたことが知られる。竪穴外部の東側及び北側にはやゝ断続的であるが溝を有する。いま北側の溝と竪穴遺構との間の1.7m前後は特に平坦でタタキ締られた状態を呈し、図示した円形の凹みは埋設甕と考えられる土師器の一部が残存したことより竪穴に連結する施設の床面と考えられる。溝は幅、深さ共一定ではないが、40～70cm幅、深さは15～30cmであり水切



第5図 1号塚下層の竪穴式建物遺構

りであろう。南面はCセクションに見られる如く地面の傾斜があり、部分的に溝遺構を求めたが検出されなかった。西側も台地の崩壊のため周溝は残在しない。

### III 遺 物

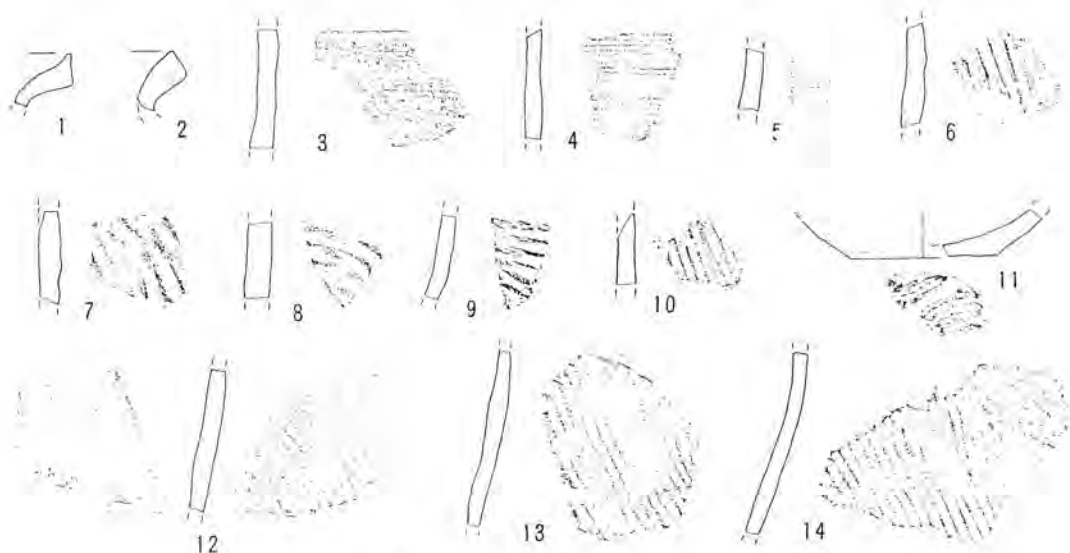
#### イ) 遺物出土状況

塚の覆土中や竪穴遺構内部及び竪穴外部の床面より幾点かの遺物を検出した。それらは土師器片62、須恵器片10、鉄製品断片17、銭貨3、仏具1、木片1、木炭4、鋳滓8である。これらの内塚の覆土中に混入するものは土師器片3、須恵器片2、鋳滓1の6点と少なく、その他は竪穴遺構内及び竪穴周辺の地山面での検出であり特に竪穴遺構北側のタタキ床面での出土が多く、逆に東、南面での検出は見ない。これらの遺物の内土師器、須恵器はいずれも細片であるが、すでに前項で記述した埋設甕状の土師器（第6図12~14、図版10）はともかくいずれも当遺構と切離して考えることは出来ない。

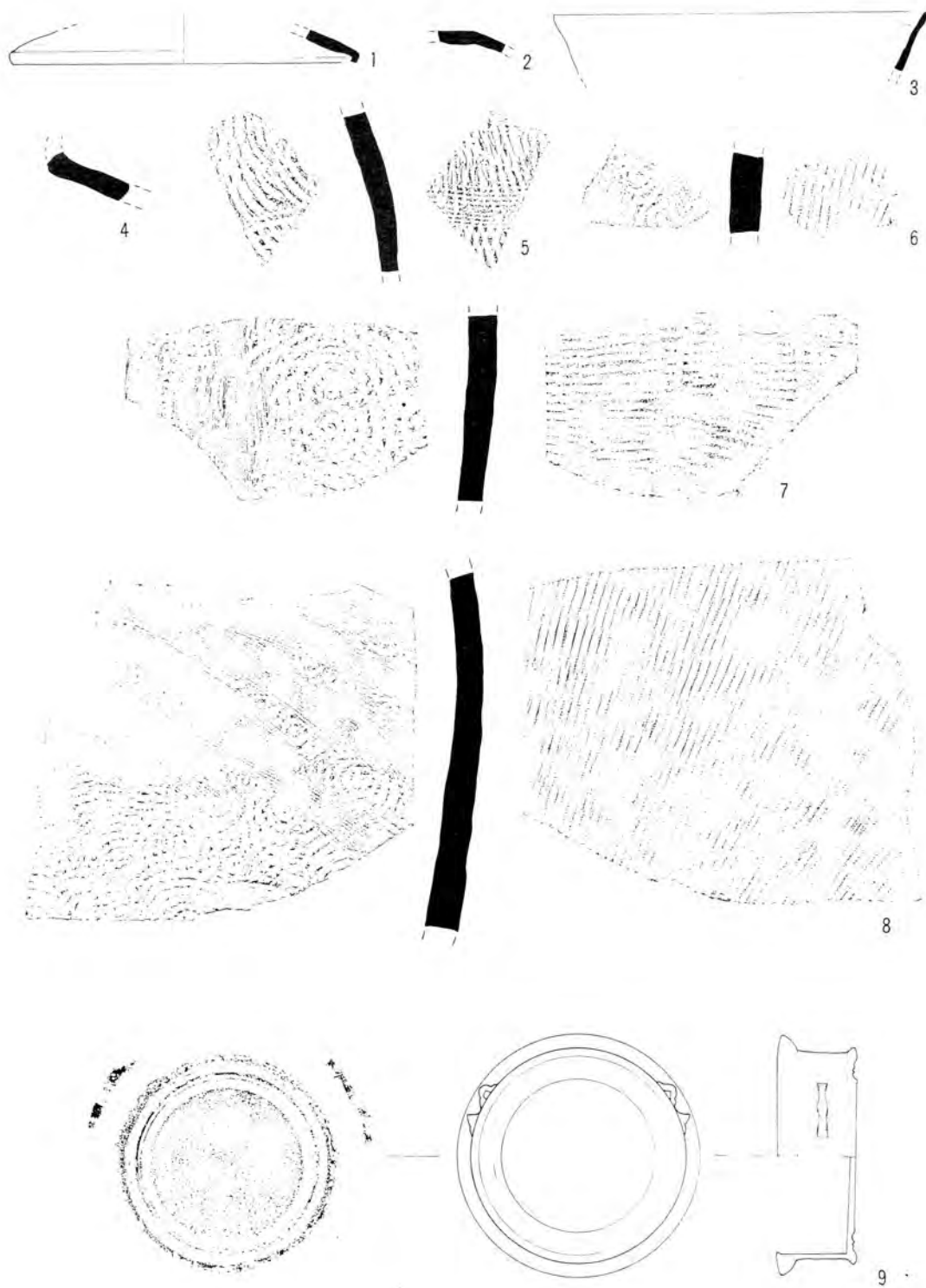
竪穴遺構内出土の土器は土師器片13、須恵器片3で、その他鉄製品2、仏具1、木片1、銭貨3がある。

#### ロ) 土師器（第6図、図版12、13）

出土点数62点はいずれも細片で器形の全容を知り得ないが、数箇体の甕形土器と坏である。これらの内の一部を第6図に示した。同図1~10はいずれも甕類である。1.2は口縁部で前者はかなりの外返する頸部と折返し状の口唇部を見せる。後者はやゝ外返する口縁で、強い抑えを見た口唇部を有する。3~5は横位のクシ目文を施されたもので甕形土器の上半部即ち胴部から肩部に当るものであろう。6~10は條線状叩目文を有するもので甕の胴部から腰部に当る部分である。施文の形態から2~3通りの個体が考えられる。この内9は内面に花卉文がかすかに見られる。12~14は前者と同様であるが、前項で記述した埋設土器で同一個体である。この他の一括品はあ



第6図 1号塚出土、土器(土師器)



第7图 1号塚出土、土器(須惠器)鉦鼓 1/3

まりにも細片で、いま急に形態を知り得ないが、胴長甕の底部に近い一部分である。11は唯一の坏底部片である。かなり外開きぎみの腰部を見るもので、製作上は底部に廻転糸切の痕跡が見られる。

ハ) 須恵器 (第7図、図版14、15)

出土点数10点の内8点を図示した。1.2は坏蓋である。いずれも細片であるが、それでも1は図上である程度復元することが出来た。内径の有効直径15cm、器の先端部が角型となる特徴を有する。2は肩部の破片である。3は口径17cmの碗である。或るいは器壁の長さから坏とも見えるが口縁部直下のふくらみから見て碗と見るのが妥当である。4は壺の肩部である。内外共無文で内面にはロクロによる工具痕を残す。5～8は甕片である。いずれも外面は叩目文、内面は青海波文、同心円文とクシ目文からなるものであるが、5の内面、6及び8の外面には布目状の施文が重複して見られる。なお8は外面に幅2.5cm間隔の紐作りの凹凸を見、さらに内面のクシ状工具の形態を察することが出来る。

ニ) その他の遺物

鉄製品断片 (図版20)、大小17点の出土である。いずれも原形を推定出来ないが、大きさは3.5cm程を最大とする。おそらくは釘類等の建築金具と考えられる。

銭貨 (図版18、19) 3枚の検出である。内2枚は原形を保たない。素材的には悪くかろうじて判読出来る文字は□宋通宝 (図版18)、開□□□ (図版19) である。前者は皇宋通宝、聖宋通宝のいずれが考えられるが、不明文字の形態から皇宋通宝と考えられる。後者は開元通宝、開基通宝、開禧通宝が考えられる。これらの初鑄年代は第2表の通りである。

仏具 (第7図9、図版16) 鉦鼓である。鏡鼓、常古または鉦 (かね) ともいう。器面の直径10cm、縁厚は駒の爪状口縁部まで3.6cmと小型のものである。器面の肩部に沿った凹帯内に2本1組の細い凸紐がめぐり、内区は水平である。縁部に花卉や銀杏葉からなる鉦をもつ。青銅鑄造製であるが、不純物の含有が考えられ材質的には不良といえる。なお製作上からみた形態は非常に精巧なものである。図版11が出土状況であるが頂部を北に向け (N6°W) 伏せられた状態で検出した。下部に木片 (図版17) が付着したことから架台の一部分と推定出来る。

銭貨名	鑄造年代
開元通宝	唐高祖 621
開基勝宝	日本淳仁 760
皇宋通宝	宋仁宗 1039
聖宋通宝	宋徽宗 1101
開禧通宝	南宗寧宗 1205

第2表 銭貨年代表

鉦滓は鉄滓と考えられるものでありいわゆるカナクソである。この出土は塚との直接的関連は考えられず、流入物と見られよう。塚の西側に接して三沢製鉄遺跡が存在する。





第9图 3号塚平面图

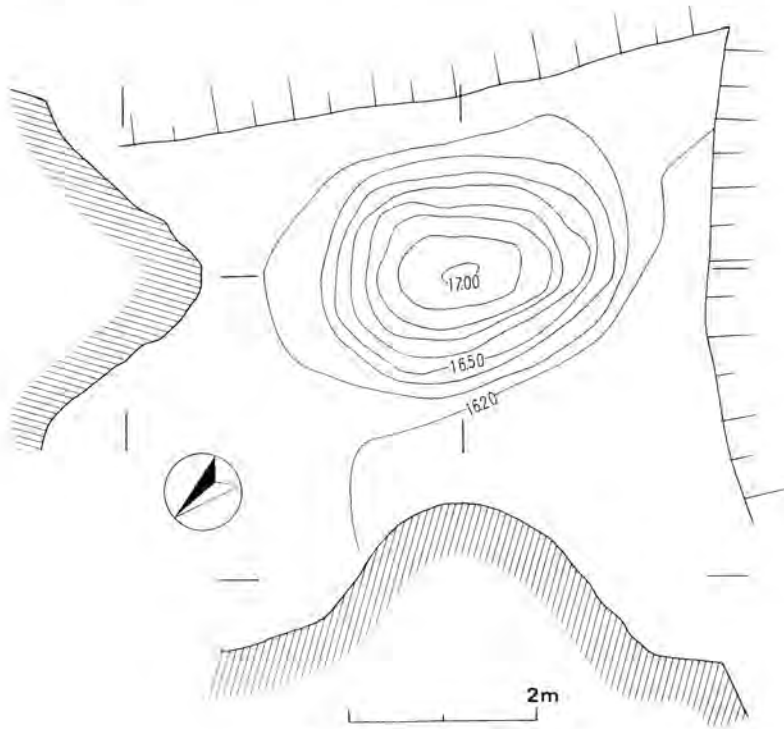
## IV 小 結

### 1. 第2号塚、第3号塚について

2号塚、3号塚の所在に関しては第1章に記述した通りである。当地地南端に当る竹林内で、坂道である町道の頂部よりさらに2m程の台地の奥部にある。第2図で記したが2号塚は台地の南東端にあるが原形はあまり損われていない。3号塚は南東端にあり数mの崖によって一部を失っている。共に孟宗竹と篠竹が繁殖し、さらに笹竹（熊笹）が密生する。これらの塚は当開発工事の対象地外に当り破壊を免れるものであるが、私達は測量の時間を得たのでここに記録した。

2号塚（第8図、図版22）は東西、南北共塚の底辺の一辺が7mを測る方形であり、頂部も一辺が3m強の方形である。現在高の17.40mは底部との比高1.40mであるが、最高地点は1点でそれより3cm高い。実測図からは東側に浅い溝が見られようが、おそらく東側での整地工作による結果と考えられる。Bセクションの方位はN24°Eである。

3号塚（第9図、図版23）長軸4.3m、短軸2.7mの隋円形を呈し、高さは0.8mを測る。現状の標高は頂部で17.02mである。現状では隋円形なりに好バランスを保つかに見えるが、東側底部と崖とに全く余裕が見られないところからかなりの流失が考えられるものである。今、長軸の方位はN42°Eである。



第8図 2号塚平断面図

## 2. おわりに

ここに調査を終えた1号塚と実測記録を留めた3基の塚を一応1号塚、2号塚、3号塚と仮称した。これが九ツ塚の名で記録されているが、地元民でこの名が通用するものではない様である。しかるにこれらの塚の各々の名称を問うても返答は得られず、伝承もまた然りである。まれに「ドロボー塚」の名が聞かれたのみであった。昭和48年度における新潟県埋蔵文化財包蔵地調査カードを再度目にとると、「昔は23基有ったと言われている、明治26年頃まで9基あった……」「東方三沢に丸塚（二畝）のもの」「三沢原のものより一字一石経が出土した。……こわした塚の中から人骨、土器類が出土したという。」とある。九ツ塚の名称はここに記された明治年間における9基の存在から発したものであることが窺われる。「東方三沢の丸塚」は現在小須戸町遺跡番号17の円塚（種別、塚、所在地、矢代田字三沢 3812）である。1号塚東方100 m地点に位置し、かつては9基の1つに数えられていたものと推定される。円塚は直径20 mを測るもので越後の蒲原においてこれ程の規模の塚は見られない。専門家の鑑定を見るまでもなくむしろ古墳と做すものであろう。「ドロボー塚」の起源は、“塚を掘れば何とか食べて行ける”即ち盗掘であった。おそらく古い時代に盗掘が行われたことが想像され、その対象となったものはやはり塚ではなく古墳であったであろうことは容易に想像される。「塚の中から人骨、土器類の出土」もまた古墳を促すものではなからうか。これらが飛躍過ぎないものであれば、この丘陵端部に古墳が点在し、それゆえに後世の塚が営まれた地域と考えられなくもない。

1号塚は特異な建造物の上に営まれた塚であった。この建物が竪穴形式ではあるが通常の生活の場とは考えられない。その面積が狭いこと、鉦鼓が残されたことからして何等かの宗教的な行が営まれたことは察しられるが、それ以上のことは今後の課題とする以外にない。塚はこの建物で行われた何らかを記念するために造営されたものと見て間違いないものと思う。近世においては即身仏の口碑が各地域にある「鉦の音が絶えたら……」と。私共は今、此様なことは考えていない。

これらの営みの時代がいつ頃のことであったのかは出土遺物に依るところである。ここで使用されたと考えられる土師器、須恵器の内、前者で特徴の見られるのは、1、2、11である。甕の口縁部の形態、ロクロによる回転糸切底を有する碗等は土師器編年の国分期及びそれ以降のものと見られよう。須恵器においては特徴的なものの把握は難かしいが、越後においてはほぼ10世紀頃のものが見られよう。出土銭貨の内1枚は不明文字の形態から、皇宋通宝と見られ、初鑄造年は1039年、他1枚は開元通宝、開基勝宝、開禧通宝が考えられ、それぞれの初鑄造年が621年、760年、1205年である。土器類の編年からみて13世紀まで降り得ることはない。

金工品全般における形態編年も進んでいることであるが、鉦鼓や伏鉦における編年例を知り得ない。現在最古の紀年銘を有するものは東大寺の長承3年（1134年）であり、兵庫、浄土寺の建久5年（1194年）がある。これらは器面に凸紐をめぐらし同心円帯の3～4区を作り出し、表面にゆるやかな甲盛をつけ、口縁部に駒爪の張出しをもたない。これらが古式の特徴と云うが、当遺物がこれらとは相反している。かといってこの鉦鼓と土器類や竪穴遺構と切り離して考えるこ

とも出来ない。この問題はなおも今後の事例にゆだねるとしてここでは一応12世紀の遺跡、遺物といわざるを得ない。なお遺構を始め、宗教的行事における事例の有無等、今後に期するところが大きい。

塚そのものの造営目的に関しては、すこぶる難解である。私達はこれまで古代の経塚を始め一字一石経塚、庚申塚その他の調査を行って来た。しかるに経塚以外には造営目的を云々することが出来ないで来たし、当1号塚も同様である。塚は何等かの目的をもった祭壇として築かれた盛土や積石構造を成すものである。日本人の聖地崇拜思想は古代より顕著であった。社寺の原始形態が一つの聖地であるが如く民間の聖地は天然の森、叢林、山、岩石等であり一方では人工の壇祠、碑及び塚を以って標示した。この様な聖地は同様に霊地でもあったはずである。当塚も何等かの祭りの場であり一方では霊のこもるところであったのだろう。下層遺構におけるなんびとかの修行を祭り、或るいは霊を祭るものであったことは言うまでもないことである。

出土した遺物の内、鉦鼓について前章で仏具としたが仏具としての確証はない。鉦に紐を通して架台に吊し撞木で叩く梵音具である。県内において知り得るものは北蒲原郡豊浦町大字福島字興野堂出土の正和元年銘のものがある。単独出土であるが県内最古のものとされ県文化財に指定されている。他に中世以前のものを知り得ない。

ごく少量ではあるが須恵器の出土を見た。当塚の南方2 km地点にある六兵衛沢窯址は須恵器の生産遺跡である。この窯址が位置的に越後の空白地を満たすものと考え、当窯址の生産物についての基礎的データが皆無である。これを機会により多くの資料を掘り起す努力も大切なことと思う。

検出された建物遺構は竪穴内にもみ柱穴を見、その柱間はわずかに1.2 m前後であるが、大きな軒を以って出入口を覆ったであろうし、場合によっては北側の主柱を高くして竪穴外のタタキ床をも覆った可能性がある。この様に考えられれば、下層遺構と塚との頂点（センター）が合致することになる。

当調査はごく限られた時間のもとで行われた。したがって研究も論考も不備なことを認める。種々の機会に改めて考えて行きたいと思う。現地調査に当り何彼と御協力下された地元の方々へお礼申し上げます。

1987. 2. 16 川上貞雄

## 参 考 文 献

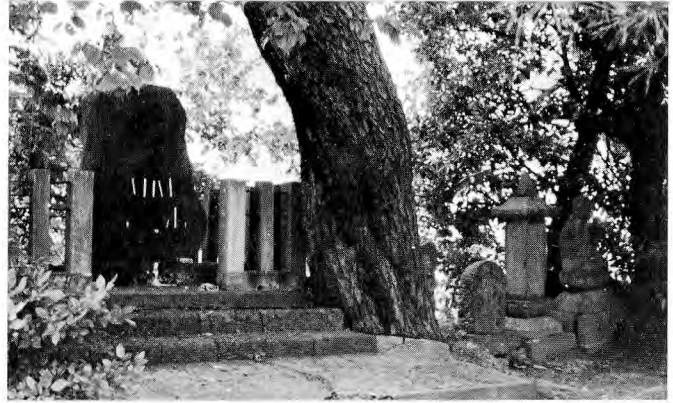
- 柳 田 国 男 「十三塚考」『民間伝承』所集（1986）  
蔵 田 蔵 編 「仏具」（1967）  
東京国立博物館 「日本の金工」（1983）  
成 田 金 八 「大沢の経筒と福島の大盤」『にいがた歴史散歩』（1984）  
青 木 一 郎 「鏡の話」（1948）  
五 来 重 「山の宗教」（1970）  
蔵田蔵 中野政樹 「金工」（1974）  
景 山 春 樹 「神体山」（1971）  
石田茂作監修 「仏教考古学講座5」（1976）  
新潟県教委 「新潟県遺跡地図」（1975）  
小須戸町役場 「小須戸町史」（1983）  
拙 稿 「八人塚」（1986）  
その他

## 図 版 目 次

I	1	遺跡遠景（西側より）	13	土師器片
	2	供養塔群	14	須恵器片
	3	遺跡近景（手前1号塚、後方供養塔）	VII	15 須恵器片
II	4	1号塚調査前全景	16	鉦鼓
	5	東側断面	17	木片
III	6	南側断面と下層遺構	VIII	18 古銭
	7	北、西断面	19	古銭
IV	8	竪穴式建物遺構	20	鉄製品断片
	9	遺構全景	21	鉦滓
V	10	土器出土状況	IX	22 2号塚
	11	鉦鼓出土状況	23	3号塚
VI	12	土師器片		



1



2



3



4



5



III



6



7





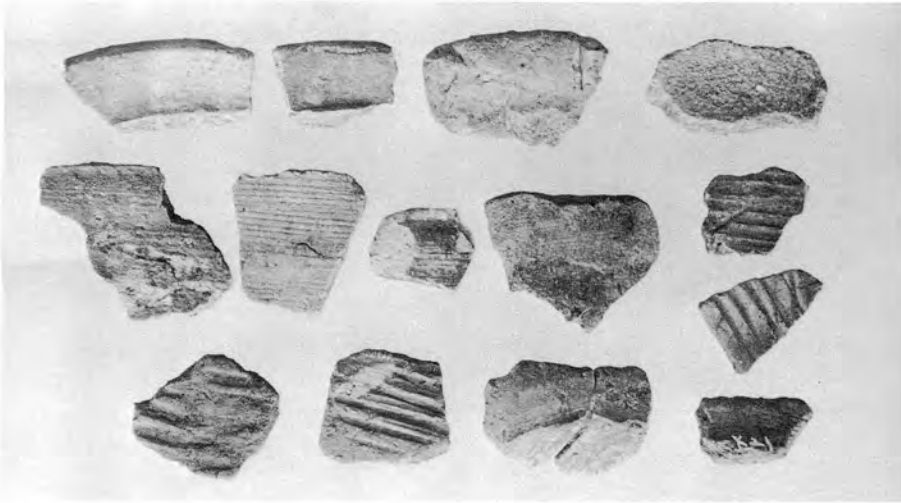
V



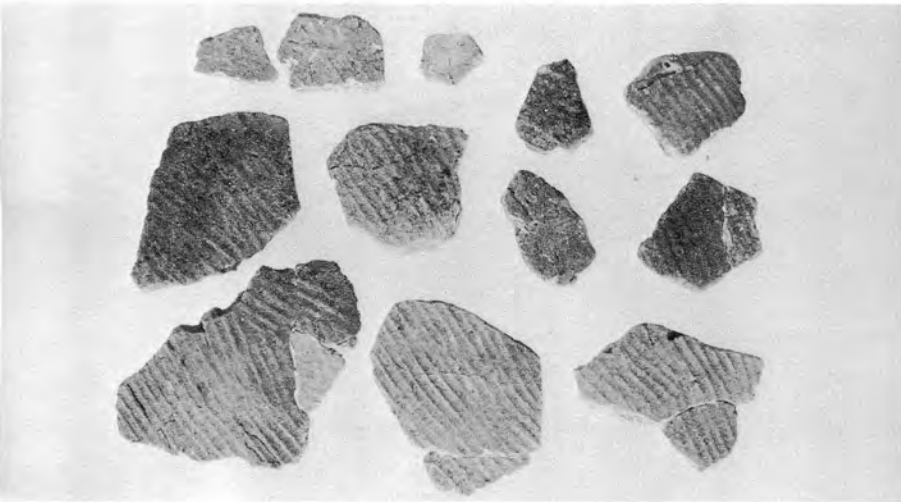
10



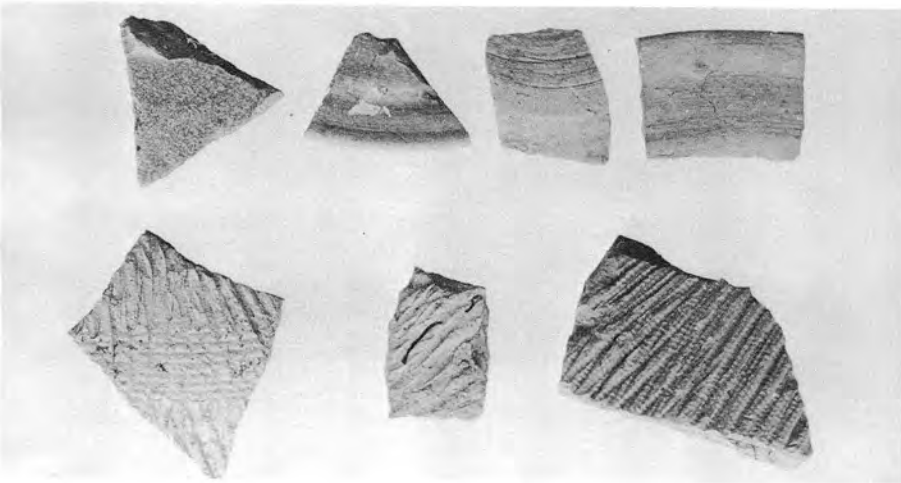
11



12

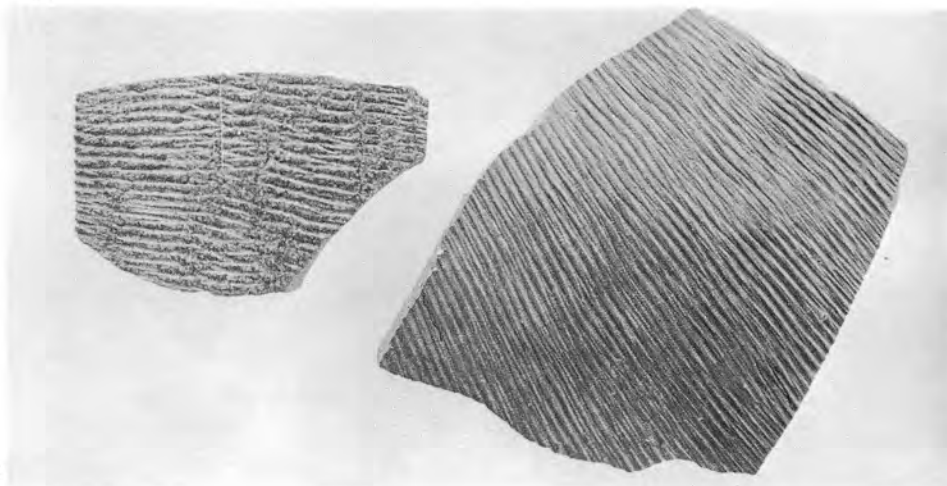


13



14

VII



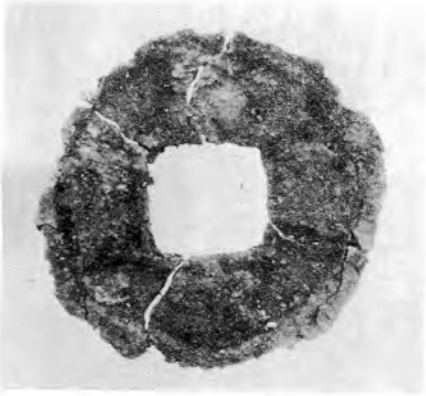
15



16



17



18



19



20



21



IX



22



23

発行日 昭和62年3月20日

小須戸町文化財調査報告 1

九 ツ 塚

緊急発掘調査報告書

発行者 小須戸町教育委員会

新潟県中蒲原郡小須戸町120

TEL 0250-38-3111

印刷所 尙玉庭印刷所